

映像プロデューサー 橋本 佳子さんに聞く

聞き手 宮田 英里●フリーアナウンサー

映像プロデューサーとは

宮田 映像は真実を正しく伝えるもの。本日のゲストは、数々のドキュメンタリー作品をプロデュースされ、「放送文化基金個人賞」「ATP個人特別賞」「日本女性放送者懇談会賞」など、数多くの賞を受賞され、ご活躍中の橋本佳子さんです。

橋本さんは、最近ではテレビ番組だけではなく、九十歳の今もなお、原発事故が起きた福島県などへ足を運び、シャッターを切る報道写真家の福島菊次郎さんを追いつけた作品『ニッポンの嘘』や、原発事故で警戒区域となり、全町民が避難を強いられる福島県双葉町民の日常を描いた作品『フタバから遠く離れて』など、ドキュメンタリー映画のプロデューサーとしても活躍されています。

私も先日、『ニッポンの嘘』を拝見しました。福島菊次郎さんの魅力や思いが存分に引き出されていたのが印象的でした。

まず最初に、映像プロデューサーとはどのようなお仕事なのかお聞かせいただけませんか。

橋本 プロデューサーが十人いれば、十人それぞれ、仕事の範囲も手法も異なります。作品によっても関わり方が違ってきますので、明確な定義はしづらいですが、「作品全体に責任をもつ役割」とでも言えば適切でしょうか。

例えば、『ニッポンの嘘』に関して言えば、企画を立てるところからスタートしました。取材対象に関わる情報を提供くださったのは、広島放送局の方でした。「自局では作品にしにくいけど、きちんとした証言を記録しておく必要があるのではないか」と相談を受けたのが出発点です。

かねてから福島菊次郎さんのお名前は知っていました。しかし、年齢を考えると、当然リタイアされていらつしやろと思うていたので、現役でお仕事をされていると聞いて、まず驚きましたね。

お会いしてみると、八十代後半（当時）だというのに、いきなりジーンズを履きなしていらして、こう言っては何ですが、セクシーでいて、どこかチャーミングな方でした。さらに、今の日本の社会状況についても、本質的で鋭い見識をおもちで、これはぜひ話を聞きたい、作品にしたい、しな



橋本佳子さん(右)と宮田さん(2012年10月13日 渋谷東武ホテルにて)

ければいけないと決意したんです。

そうと決めれば、どのような作品にするか、具体的なフレームづくりに着手します。テレビ番組にするのか、映画にするのか。例えば、テレビ番組として制作するならば、どこの放送局のどの時間帯での放映に狙いを定めるのかを考え、具体的な形に落とし込んでいきます。

そして、演出は誰に頼むのか、撮影はどうするのかなど、スタッフを具体的に決めていくわけです。並行して、一カ月の撮影で完成するのか、三年かけなければできない作品なのか、予算も含めて作品の規模を明確にします。

プロデューサーとは、作品の大きな意味においての意思決定者ということです。

日頃から社会のリアルな姿に目を向け 鋭く深みのある企画を立案する

宮田 ドキュメンタリーは、独特な視点から社会のリアルな姿を映しとる作品が多く、目のつけどころがユニークなものも少なくありませんよね。そのような企画はどのようなところから生まれてくるのでしょうか。企画を立てるために、日々、情報収集

などもされるのでしょうか。

橋本 もちろん、日頃の情報収集は欠かせません。ただし、スタッフにもつねに言っていることですが、ネタは「現場」にあるんですよ。インターネットや新聞等で調べた情報から企画を立てると、どうしても二番煎じなものになりがちです。現場の中で、自らの肌感覚で触れた一次情報をもとに企画を立てるのがベストだと思います。

スタッフにはつねに、「次の企画は現場にあるよ」と言っています。実際は現場では夢中になって撮影していますから、並行してネタ探しをすることは大変ですけど。**宮田** 撮影が始まると、橋本さんも現場に行かれるのですか。

橋本 それもケース・バイ・ケースですね。

基本的には、撮影が始まると、そのつど進捗状況などは確認しますが、監督やディレクターの責任で撮影を進めてもらいます。プロデューサーは、つねに現場にいるわけではありません。一般的には、ドキュメンタリー作品の場合、機動性や、あまり大勢でお邪魔しないという取材相手との関係、それと予算が限られていることもあり、少

橋本 佳子さん



人数で撮影するほうが多いのです。長期間撮影しようと思えば、ディレクターとカメラマンだけという撮影や、ディレクターが一人で撮影も兼ねるということもあります。

富田 ドキュメンタリー作品を見ていていつも感じるのは、出演者との距離間です。出演者との距離感をあそこまで縮めるためには、相当な「苦労」があるのではないかと感じます。

カメラの前では、本当は見せたくないようなプライベートの場面でさえも、包み隠さずありのままの姿を撮らせてしまう。どうしてこんな近くまで対象者に入り込めるのだろうか、不思議に思いながら拝見しています。

橋本 大切なのは、信頼を構築するために十分な「時間」をかけることです。撮影に入る前に、こちらの意図をお話しするなどして、出演者と十分に信頼関係をつくりあげる。ドキュメンタリー作品の裏側には、カメラに映っていない膨大な時間があるんですよ。

避難所暮らしを続ける双葉町民の日常を描いた最新作『フタバから遠く離れて』では、監督が約一カ月間、避難所に通いつめ、町民の皆さんとコミュニケーションをとりました。何しろ避難所の入り口には、「マスコミはすべてお断り。カメラ撮影は厳禁」と張り紙が掲げられていましたから、なおさら監督は気を遣って、関係構築に時間を費やしました。

今なお続く震災による避難所生活 現在進行形の映像を見て考えてほしい

富田 私らラジオの取材で避難所に出かけたこともあります。なかなか取材させていただけませんでした。避難所生活を支援される方にはインタビューすることができて、じかに避難者の方から気持ちをおうかがいすることは、非常に難しいことで、

私たちが思う以上に、取材を受けること自体が大きな負担となることを思い知らされました。

特にドキュメンタリーの場合は、始終、

カメラで撮影されることになるのですから、信頼関係が何よりも大切になるわけですね。

橋本 廃校になった高校の教室に畳を敷き、段ボールで区切られた「寓店」で、避難所生活を続け、あてのない帰郷を待つ人々。配給されたお弁当を三百六十五日食べ続ける……。今なお苦渋の避難所生活を強いられている双葉町民の方々。その現在進行形の現実をぜひ多くの方に見ていただきたいです。

富田 そのような苦しい胸の内まで深くお考えになる映像プロデューサーのお仕事をされる中で、大切にしていることはどのようなことでしょうか。

橋本 今お話ししたことともつながりますが、ドキュメンタリーをつくるうえで何よりも大切なのは、撮影を受けていただく方とわれわれ取材者との関係です。その関係で作品はできています。

長い時間を共有するわけですから、なるべく双方の思いを共有できればと考えてい

ます。

ドキュメンタリーに限ったことではなく、どんな仕事でも、関係性が仕事の質を高めるうえで重要だと思っていますね。

制作した番組や映画を通じ社会が

良い方向に変わっていく可能性を追求

宮田 できあがった作品の視聴率や観客動員数などは気にされますか。数字に対するプレッシャーも感じられますよね。

橋本 視聴率がすべてとは思いませんが、大切な物差しの一つだと思っています。

私たちが番組をつくる原動力は、広く多くの人に伝えたいという強い思いからです。視聴率を上げるための工夫は、できるかぎ



宮田 英里さん

り行っています。

ですからプレッシャーもありますよ。放送翌日には必ず一分刻みの視聴率をチェックしています。とはいえ、ドキュメンタリーはドラマなどに比べると視聴率は高くないので、大きいことは言えませんが。

宮田 ではそうしたプレッシャーの一方で、やりがいを感じる瞬間について教えてくださいいただけますか。

橋本 視聴者や撮影させていただいた方から「おもしろかった」「いい作品だった」という声を直接いただいたときが一番やりがいを感じます。作り手としては、こちらの思いが届いたと手応えを感じることができたときが何よりもうれしいですね。

さらに、制作したテレビ番組や映画をきっかけに、何か新しい出来事が生まれたり世の中がより良い方向に変わっていくきっかけになったりすれば最高ですね。そうした可能性も追求していきたいんです。

宮田 橋本さんは、映像プロデューサーとして、およそ三十年にわたり第一線で活躍されてきています。そもそもこのお仕事を始められるきっかけは、どういうものだったのですか。

橋本 全くの偶然なんです。昔からテレ

ビは好きでしたし、わりと見ていたほうですが、テレビ業界で働くことになるとは考えたこともなかったですね。

私が大学を卒業した年は、いずれのテレビ局も新卒の採用を控えていましたから、なおさらテレビ業界とは縁がないと思っていました。

初めてテレビとの接点をもったのは、大中学卒業後数年が経過したころのこと。知合いの紹介で、TBSの報道局のアルバイトをすることになったんです。とはいえ、あてがわれるのは、お茶くみ、コピーや新聞の切り抜きなどの補助的な仕事ばかり。毎日十時から十八時ぐらいまで働いていま

したが、これではまだテレビの現場に足を踏み入れたとは言えませんでした。

むしろそのころは、芝居の世界にも相当のめり込んでいて、仕事の合間に、小劇場の芝居の演出も手がけるようになっていたんです。芝居は高校生のころから好きで、演劇部に在籍して女優としても活動し、東京都のコンクールで賞をとったこともあるんですよ。自分で演出もしていましたから、将来は舞台の演出家になりたいと思ってい

ました。

大学生になって、演劇から映画に興味が移りましたが、卒業してから、また縁があって芝居を始めたので、演出のほうへ進めればと考えていました。

宮田 好きなことを仕事にできるのは楽しいことですが、好きな職業が適職かどうかは、実際に体験してみなければわかりませんね。

橋本 モラトリウムというわけではないですが、自分が何者になるのか、どうしていきたくないかがわからず、必死に模索していた時期かもしれません。しかし、それからほどなくして、演出家としての限界を感じたんです。

直接の契機になったのは、ある芝居の演出をしていたときのことでした。脚本を書いていただいた方に、稽古場で演出家として完膚なきまでにたたきのめされ、相当に自信を失いました。

もし、芝居の世界で挫折を経験しなかったら、今も演出家を目指していたかもしれませんが、そのときの経験で完全に吹っ切れましたね。これがテレビでやっていこうと決心する転機となりました。

男性社会のプレッシャーに打ち勝ち テレビ業界のおもしろさに夢中に

宮田 その挫折が橋本さんの将来を決定づけたんですね。

橋本 ちょうどそれと前後して、アルバイト先のTBSの方から、ドキュメンタリー番組を手がけるテレビ制作会社に行かないかという話があったて、そこに中途入社することになりました。

初めのうちは、見習いとしてデスク業務を行っていたのですが、やはり現場に出たいという思いがある。でも当時のテレビの現場は、典型的な男性社会。女性が働くのは大変だったんです。

宮田 今ではテレビ業界で女性が活躍することが当たり前になりましたが、かつては、閉鎖的なところがあつたという話も聞きますね。

橋本 ADとして現場に行くと、露骨に「女性が来たのかよ!」「邪魔しないでくれよな」なんて言い放たれたこともありました。

だから、相当気を遣いました。女性だから重い荷物は持てないと思われたくなかつたので、率先して人よりも荷物を持ちましたし、誰よりも早く現場に行きました。野外ロケでは、トイレに行かないように極力水分をとらないことを心がけたものです。男性スタッフに迷惑をかけたくない一心でした。

それでも、辞めたいとは思いませんでした。むしろ、ADをやりながら、ドキュメンタリーのおもしろさにどんどん魅了されていきました。

宮田 その後、橋本さんは、仲間の方たちと自らテレビ制作会社を設立されます。

橋本 ちょうど三十歳のときでした。七、八人の仲間と、ドキュメンタリーに特化した制作会社「ドキュメンタリージャパン」を設立したんです。それから三十年たちましたが、プロデューサー業を続ける一方で、二十年間ほどは代表取締役として経営の陣頭指揮も執ってきました。

スタッフも現在は五十名ほどにまで増えましたが、初期のころから女性社員を多く採用し、今やスタッフの半分は女性です。業界全体を見ても女性が働きやすい環境になってきたことは、とてもよいことだと思います。

宮田 橋本さんは、プロデューサーとして数々の賞を受賞されています。これまでのキャリアを振り返って、特に印象に残っていることはどんなことですか。

橋本 私はあまり過去を振り返らないんですよ。これまで数限りない番組をプロデュースしてきましたが、作品のDVDすら一枚も持っていない。続編を作るときには会社のライブラリーから借りて、確認することもあります。過去を振り返る習慣はほとんどありません。

「前に、ああいう番組をやったよね」と指摘されると、思い出しはするのですが。でも、どちらかというと、いつも明日のことはかり考えている性格なので、放送が終わってしまつと、もう次の番組のことを考えています。

「大学解体」を叫びながら入学を目指す矛盾 進学したことで得られた友人との青春時代

宮田 先ほど、高校生のころは演劇部に入られていたとおっしゃられていましたが、女優ではなく大学へ進むことを決められたきっかけは何だったのでしょうか。

橋本 私の高校時代というのは、大学紛

争真っ盛りの時代でした。東京や大阪などの大都市では、高校でも校舎にバリケードが築かれ、騒然としていました。高校三年の一年間は、授業らしい授業は行われませんでした。いわゆる「高校紛争」です。

そうした中、授業もないので、私たちは新宿で街頭演劇やパフォーマンスを試みたり、小劇場へ演劇を見に行ったり、つねに街に出ていましたね。さらにゴダールやトリュフォー、大島渚などの「ヌーベルバーグ」の映画にも影響を受け、興味を持ち始めていた時期でした。

そういう環境ですから、勉強は一切しない。これでは大学に受かるはずもないし、受ける気さえありませんでした。「大学解体」と叫びながら、大学に入学するのは明らかに矛盾しているとの考えが強かったからです。同期の友人のほとんどは、この年には大学を受験しませんでした。まあ、皆、翌年には受験したのですが。受験どころではない、そんな気でした。

ただ、年が明けて卒業が近づいてくると、私自身は気持ちが揺れ動いてくる。将来どうなるのかという不安も出てくる。そして、三月の末になったころ、たまたま二次募集

をしている大学が二校あることを知るんです。それで、さんざん悩みなながらも、その中の一校を受験したんです。結果的に合格して、成城大学に入学しました。受験をして大学へ行ったことが、何か少し後ろめたかったです。

宮田 大学では熱心に勉強に励まれたのですか。

橋本 そちらはまるつきり自信がありません。何しろ高校三年生から学校に規則正しく通学しない癖がついていますから。とはいえ、あつけないくらいに普通の大学生活を送りました。映画のおもしろさに目覚めて映画研究会に入り、十六ミリ作品を作ったりしていました。思い返せば、それが映像に関わる本格的なきっかけだったとも言えますね。

宮田 高校紛争なども経験し、葛藤や悩みを抱えられたうえでの進学ということですが、今振り返られて、大学へ進学してよかったと思えますか。

橋本 私たちの世代は、大学そのもののや教育制度に対して、自分たち自身も含め、問いかけた時代でした。でも、行つてよかったと思います。映画研究会の仲間も含め

て、友人たちと青春時代を共にできたのは、大学に入学したからこそです。

東日本大震災を経て 学生の社会意識が向上

宮田 そんな激動の時代と比べ、大学全入時代の今の学生は、以前とはタイプも違ってきているように思います。

橋本 私は、今の大学生は驚くほど意識が高いと思っています。今、BSのテレビ番組で『田原総一郎の仰天歴史塾』という番組をプロデュースしています。これは、塾生である大学生に対し、塾長の田原総一郎さんが日本の近現代史を授業形式でわかりやすくレクチャーする番組です。

塾生として八人の大学生が出演してくれているのですが、彼らはとても社会に目を向けています。何らかのNPOに参加したり、教育を満足に受けられない子どものために家庭教師を行ったりと、とても活動的です。中にはベビーシッターをしている学生もいるのですが、そのアルバイトを選んだ理由がとても印象に残っています。

彼女の持論は、女性はずっと社会に進出すべきというもの。その一方で、働く母親

を支える制度が充実していないことに着目し、自分たち大学生が支えるべきだと強く思ったのです。さらに、ベビーシッターの仕事を通じて、働く母親の姿を間近に見ることで、働く女性のあり方やその苦勞を理解できる。それもベビーシッターをアルバイトに選んだ理由の一つだと打ち明けてくれました。

非常に行動力もあって、在学中にベビーシッターの団体を立ち上げようと、今精力的に立ち回っていますよ。

宮田 とてもすばらしい考えですね。その意識の高さは、何を背景にしているのでしょうか。

橋本 やはりその背景には、東日本大震災があると思います。番組に出演している学生たちも、東日本大震災を契機に変わった口々に言うんですよ。震災によって、日本が抱える矛盾や問題点がむき出しにされ、それに真正面から対峙しようとしているわけです。

私の息子も大学生ですが、震災が発生して二週間後には被災地にボランティアに行きました。当時は混乱を極めていましたから、よほどのしつかりとした受け入れ団体

がなければ現地で活動するのは難しい時期でしたが、自らボランティア団体に連絡したようで、今でも継続的に現地に赴いています。学生が運営している組織ですが、延べ一万二千人もの学生が活動していると聞いて、ますます感心しています。

宮田 東日本大震災は多くの日本人の意識を変えたとも言われています。特に現在の若者は、具体的に行動に移しているところに特徴がありますね。その行動力には、私自身も感心させられます。

橋本 今の若者は劣化していると指摘する人は少なくありませんが、私を知るかぎり、その批判は全く当たっていませんね。われわれの世代に比べて、情報量が多いということも大きいでしょう。中にはそのおびただしい情報に振り回されてしまう人もいるんでしょうけれど、その情報をうまく咀嚼して、自分の進むべき道を探していく対応力を多くの若者が備えているんだと思いますね。

宮田 今の若者は非常に意識も高く、自分は何をやりたいのかをしつかりと持っている一方で、会社に入ったとたん、「自分のやりたいことができない」「仕事が自分

に合わない」との理由で、早期に退職する例も目立ちます。ご自身の歩まれてきたキャリアなども踏まえて、そうした現状について、どのように思われますか。

橋本 我慢が足りないということもあるのかもしれませんが、でも昔から五月病ってありましたよね。さらに雇用市場も変化し、終身雇用も崩れ、転職もごく普通のことになっているので、そのような面も併せて考えるべきなのではないでしょうか。

むしろ重要なのは、一人ひとりが、たとえ時間がかかったとしても、自分なりの天職を見つけること。「この仕事でいいんだ」と感じるのだと思います。



元来志望していた職業に就いても、それがどうも違うと思うなら、選び直しをしてみる。一方で、自分は何をすべきかわからなかったけれど、とりあえずの仕事をしてみたら非常にやりがいを感じた。自分に合っていたということを見出す場合もある。それは自らの責任のもとで判断し、選択をしていくしかないですね。

若者よ

日本、社会を変えていくのは君たちだ

宮田 息子さんがちょうど大学生でいらっしゃるのとことですが、今日の大学について、どのような考えをおもちですか。

橋本 最近、私のところにも送られてきてびっくりしたんですが、成績表が保護者に送られてくることです。授業料を納めているのは親ですから、子どもの様子がわかり、面倒見が行き届いているとは思いますが、私のころの大学生はもう少し大人扱いされていたように思います。

こうした大学の変化がいつ、何をきっかけとして起きたのかを知ることが、現在の社会状況を知るうえで重要な観点かもしれません。

それから、先日、休留学者の授業料について調べる機会があったのですが、かつてよりも休学や留学がしやすい制度になっているようです。せっかくの学生時代ですから、日本の大学でもギャップブイヤーを導入したり、インターンで学生に社会的経験を積ませたり、視野の広い国際競争力をもつ人材の育成に取り組むことも必要かと思っています。

宮田 それでは、最後に大学生にメッセージをお願いします。

橋本 大学とは、社会に出るまでの猶予、準備期間です。学生時代には、思う存分、自分なりの活動を続け、学生時代にしかできないことを精一杯追求して、悔いのないように過ごしてほしいと思っています。

番組に出演してくれる学生たちも、東日本大震災からの復興は、自分たち若者が中心となって、世の中をより良くしていきたいと話していました。今までの既成の価値観や概念にとらわれず、今の何となく閉塞感のある日本の社会のあり方に風穴を空けて変えていけるのは、この若者たちではないかと非常に期待しています。新しい潮流が彼らから生まれる予感がします。